

秀賞

10年後、24歳の君に
福島県いわき市立湯本第二中学校
3年 遠藤 夕騎

私は、魚が大好きな14歳である。魚においては、食べることも、捕ることも、見ることも大好きである。そして、将来は、海洋研究者になりたいと思っている。なぜ、海洋学に携わりたいのかについては、今から7年前へさかのぼる。

7歳の夏、私は、近所の川で父と初めて魚捕りをした。とても暑い日であったのを覚えている。隣にいる父に、魚の捕り方を教えてもらおう。網を川下に付けて、川岸の草むらを足で探る。魚が勢いよく飛び出して、網の中へ入ってくる。

「ガサガサ、ガサッ。ガサガサ、ガサッ。」

私は、見よう見まねで網を使い、草むらを足で探った。すると、足に何かぶつかってきた。驚いて網を勢いよく引き上げると、網の底に10センチメートルほどの小さなナマズが1匹だけ入っていた。

「うあ！ ナマズが捕れた！」

私は、このナマズを家に持ち帰り、水槽で飼うことにした。ナマズは、見ていてとても楽しかった。泳ぐ様子、餌を食べる様子。毎日、水槽の前から離れなかった。また、ナマズはどういう魚なのか、家にあった図鑑で調べた。そのうち、近所の川では捕れる魚も限られてきて、もっと他の魚が捕れる場所に行きたい、と思うようになっていった。

夏も終わりが近づくと、父と車で山奥の川に魚を捕りに出かけた。

二つの大きな網を持ち、川の中に入ると、水は背中がヒヤッとするほど冷たかった。どんな魚が隠れているのかを想像すると、ワクワク感が水の冷たさを上回り、どんどん川の中に入っていく。網を設置し、川縁の草むらを揺する。また揺する。……捕れない。何度やっても魚が捕れない。でも、諦めずに繰り返す。隣を見ると、父も夢中だ。場所を変えながら、網を設置しては草むらを揺する。

すると、ナマズを捕ったときと同じような感覚が、私の足に伝わった。網を素早く上げると、そこには、キラキラした銀色の体に、朱い斑点が散りばめられた15センチメートルほどのヤマメが入っていた。

興奮した。ヤマメは図鑑で見えていたが、警戒心が非常に強いため、なかなか捕ることができない魚だ。家に帰ってもう一度図鑑を確認したが、やはり捕まえた魚はヤマメで間違いはない。

後で聞いたのだが、私はこのヤマメを詳しく調べていくうちに、なぜ1本の川なのに、上流はこんなに水が冷たいのか、なぜ上流ではナマズが捕れないのかなど、多くの質問を父にしていたそうだ。この年は魚を捕りに行っては、家で調べることの繰り返しだったらしい。

次の夏、私は地域が行っている川の水質調査に参加した。調査では、川の水を採取し、においを嗅いだ。他の人は無臭と言ったが、私は去年ヤマメを捕ったときの川のにおいに似ていると感じた。また、水生昆虫もたくさん採取した。私たちの周りには、豊かな川があり、そこに水生昆虫が住み、それを魚が食べている。そして、人間がその魚を食べて生きている。この水生昆虫が魚の貴重な餌となり、生態系を支えていることに感動した瞬間だった。

冬は、川の清掃活動に参加した。川の周囲は道路に接している部分があるためか、多くのごみが落ちていた。中には川に直接捨てていく人もいるという。この話を聞いたときに怒りを覚え、魚がいかにも人間のごみに苦しめられているかに改めて気付かされた。

12歳になると、夏休みの自由研究に川の水質調査を選んだ。地域の川の水を上流から下流まで採集し、調査した。予想通り、上流の水質はきれいだが、下流に行くにつれて生活排水やごみなどの影響で汚れていることがわかった。

最近では、地球温暖化やプラスチックごみなど、自然環境が悪化するさまざまな問題が増えてきている。これらは人間の手によって引き起こされた、いわば人災だ。人間がした環境破壊を自分たちの力で食い止められないか。こう考えた私は、海洋学を学び、研究者になりたいと思った。

10年後の自分へ

24歳になった君は、今、どんな仕事をしていますか。大学時代に、学校も行かず世界中の海を回ったため卒業できなかった、ということはありませんよね。持ち前のガッツで卒業し、夢だった海洋学研究者になっていることでしょう。研究者になれば、今までのように自由気ままというわけにはいきません。社会に出ると責任がついて回ります。もし悩んだり落ち込んだりしても、魚が好きだ、自然を救うのだ、という気持ちを思い出して、困難を乗り越えてください。10年後、24歳の君に会えることを楽しみにしています。